

高齢者移動支援の現実と今後の方向性

～ 花月・朝日の取組が示す地域共助と構造転換の道 ～

【社会構造の課題】

- ・高齢化と交通空白が進み、移動が生活課題化。
- ・「運転せざるを得ない」構造が続き、交通・福祉・住宅の縦割りが課題解決を難しくしている。
- ・個人の努力ではなく、社会全体の設計として見直す必要がある。

【構造的連鎖：移動と担い手の問題】

高齢者が運転せざるを得ない背景には、公共交通の減少だけでなく、地域内の“支え手”の減少がある。若年層の流出と就労環境の変化により、地域活動やボランティアの担い手が不足し、結果として高齢者自身が“自ら動かざるを得ない”状況を生んでいる。

移動問題と担い手問題は別の課題ではなく、地域構造の同一線上にある現象である。

したがって、交通政策だけでなく、「支える人」をどう増やすかという視点が不可欠である。

【地域の実践：花月・朝日】

- ・花月地区では、地域交流館を拠点に送迎支援を展開。社会参加や見守りを兼ね、地域の共助モデルとして定着。
 - 一方で、ボランティア負担・車両維持費・燃料費の上昇など、運営の持続性が課題。
 - ・朝日地区の「とぎの会」は少人数体制で通院・生活支援を続け、地域の信頼を得ている。
- ただし、担い手の高齢化と安全確保の仕組みづくりが急務となっている。

いずれも市民自治の象徴的取組であるが、想いの継承・役割分担の整理が求められている。

【市の現状と構造課題】

- ・市は花月・朝日の活動を前向きに評価し、社協と連携して支援対象に位置づけつつある。
- しかし、制度整理は不十分で、実態は地域の自主運営に依存している。
- ・公共交通の利用減少と財政制約の中で、持続可能な支援モデル化には至っていない。
- ・今後は行政が“支援者を支える”側に回る構造転換が必要。

【構造転換の方向と具体策】

方向性	具体策
生活圏の再構成（移動 居住）	周辺地域の高齢者が中心市街地の市営住宅・空き家活用住宅へ移りやすくする制度。家賃軽減・引越支援を組み合わせ、“移動に頼らない生活”を設計。
市営住宅の多機能化	高齢化率の高い住宅を地域型福祉拠点に位置づけ、訪問介護・デイサービス・買物代行を出張化。既存建物を活用し、段階的に導入可能。
公共交通の再編・連結	花月・朝日と市街地を結ぶデマンド交通＋ミニバスを時刻連動。医療・商業施設の時間帯に合わせて集中運行し、既存予算内で効率化。
交通×福祉の一体運営	移動支援ボランティアを市・社協の登録制に。保険・補助・研修を付与し、“善意を支える制度”として整備（地域交通人材バンク）。
官民共創モビリティ実証	運輸・介護・物流と連携し、軽EV・乗合EV・シェアカーを活用した地域限定モビリティ実証を実施。市は調整役に徹し、コスト抑制と制度化を検討。

構造転換の核心

「移動を前提とした暮らし」から「支え合いが届く暮らし」へ。
人を動かすまちではなく、人を支えるまちへ。